

大正四年六月二十一日第三種郵便物認可（每月一回一日發行）
經濟論叢 第二十五卷 第四號

田島博士記念論文集
還曆祝賀記

京都帝國大學經濟學會

昭和二年十月一日發行

經濟論叢

第二十五卷第四號

(通卷第百四十八號。禁轉載)

經濟學の四問題

作 田 莊 一

經濟學の研究過程に於ては、我等は先づ經濟概論を學び、次に經濟各論に亘り、終に經濟原論に達する。而して經濟原論に於てはその序論的研究として經濟學上の問題論と方法論とを考究しなければならぬ。問題論は經濟學に於て研究せられる問題の何たるかを究明し、方法論は定まれる問題を解釋する方法の何たるかを究明する。方法は問題によつて相違するが、方法の相違はこれを用ゐる科學の性質を決定するものではない。經濟學が如何なる性質の科學であるかは一にその問題の性質如何によつて定まる。私は今、經濟學の問題論を問題とする。

經濟學の問題は經濟の問題と同一ではない。經濟の問題といへば、單に經濟生活に就て知らうとする場合にかかる問題であるが、經濟學の問題といへば、經濟生活に就て體系的に知らうとする場合に起る問題である。體系的といふは無論、外觀に於て智識の表現方法が組織立つてゐるといふ意味ではなく、専ら箇々の智識が内面的に統一、的關聯を成してゐることを意味する。章節を分

けて幾萬の文字を連ねようとも、各節が全體に於て生きてゐないものは體系的ではない。書簡の一篇にても往々立派な體系が期待され得る。我等が經濟の問題を更に體系的に知らうとする問題として取扱ふとき、それが經濟學の問題となる。

經濟學の問題は尋ね當てるだけ、思ひ付くだけ幾らでも起つて來る。しかし現に與へられたる問題の外に尙、起り得る問題を考慮に入れて、種々雜多の問題を整理するならば、基本問題と思はれるものが四つある。この四問題は經濟學の諸問題を凡て包容するには一として缺くことの出來ない必要の問題であり、且又、この四つを以てすれば凡ての問題を包容して餘す所なく、それだけで充分であると考へられる問題である。尙、この四問題を基本的と云ふは、經濟學の研究目的に徴するときは、この四つが各々獨特の意義を有し、これらを更により少き問題に包括し得ない所から、諸問題の總括をこの四問題の所にて停止しなければならぬといふ意味である。

二

然らばその四問題とは何であるか。先づ左の例を舉げて説明を始めた。

第一、日本にては或年に、米の價格が市場に於て、一石二十圓から五十圓までの間を上下した。

第二、日本にては或年に、政府が米の價格を一石三十五圓に維持した。

第三、日本にて或年に、米の價格が市場に於て一石二十圓乃至五十圓といふやうに動搖することとは、米の生産者並に消費者にとつて生活を不安ならしめる意味に於てよくない。

第四、日本にて或年に、政府が米の價格を一石三十五圓に維持することは、米の生産者並に消費者にとつて生活を安定ならしめる意味に於てよいことである。

以上の例が示すやうに、第一の場合は、米の價格が何者の意識的企圖にもよらないで自然に決まり、價格に就て何人も計畫及び責任を持たない自然の出來事である。斯の如く經濟上の出來事が自然に現はれる場合にはこれを自然經濟の現實態といふが、我等は先づそれが如何に存在するかを認定する。

第二の場合には、政府が米の價格を公定するが、その價格は國家の意志によつて決められたものである。これは自然の運動でなく意志の活動である。斯の如く經濟上の出來事が意志から起つて來た場合にはこれを意志經濟の現實態といふが、我等はこゝではそれが如何に存在するかを認定する。

第三の場合は前二者と趣を異にし、米の市場價格が自然に動搖したる事實は、やがてその事實がそのまゝに若くは幾分變つて次に現はれるであらうといふ傾向を伴ふ。我等はこの傾向に對して生活目的より見たる可否を判斷する。斯の如き經濟上の自然の發動傾向はこれを自然經濟の實

現態と名づけるが、我等はそれが如何に生活目的に適合するかを判定する。

第四の場合では、國家の意志が米の價格を決めようとする。こゝではその決定の是非が問題となる。斯の如き經濟上の意志の發動要求はこれを意志經濟の實現態と名づけるが、我等はそれが如何に生活目的に適合するかを判定する。

以上を要約して言へば、第一には、價格が自然に決まるとき、如何に決まるかを見る。第二には、價格を意志が決めるとき、如何に決めるかを見る。第三には、價格が自然に決まらうとするとき、如何に決まるかを見る。第四には、價格を意志が決めようとするとき、如何に決めるかを見る。これらを一般的に言へば、我等は經濟に關して知らうとする場合には、第一には、自然經濟の現實態に對して存在如何を認定しようとし、第二には、意志經濟の現實態に對して存在如何を認定しようとし、第三には、自然經濟の實現態に對して適合如何を判定しようとし、第四には、意志經濟の實現態に對して適合如何を判定しようとする。これらの四問題は各々獨特の意義を有し、一を他に收容することは出来ない。見方を變へるならば、第一及び第二の問題は、共に經濟に關する現實態の存在を認定するものであり、第三及び第四の問題は、共に經濟に關する實現態の適合を判定するものであるが、更に第一及び第三の問題は、自然經濟に關する究明であり、第二及び第四の問題は、意志經濟に關する究明である。この見方では問題

の内容が入交つて來るが、問題はやはり四つとなる。これに比ぶれば、寧ろ初に列擧したる四つの問題が獨特の意義を示せる點に於て優り、これを經濟學に於ける基本問題となすのである。

三

凡そ科學の問題はその研究目的によつて定まり、研究目的は體系的に何かを知らうとするにある。この一般問題に於て何を知らうとするかの間には何に對して知らうとするか並に何に就て知らうとするかの二つの間を包含する。前者は或科學の研究對象の何であるかを指し、後者はその研究任務の何であるかを指す。對象は能知者に對する所知者の性質如何によつて定まり、任務は能知者が所知者に面接する場合の態度如何によつて定まる。

經驗科學にあつてはその對象は、自然又は意志であり、これによつて自然科學と意志科學との別を生ずる。この二類の科學の區別に就ては、私は専ら研究對象の相違を見て、普遍化して見るか簡別化して見るかといふやうな研究方法の上から立てる差別を加味しない。この方法の相違は、寧ろ對象が自然なると意志なるとによつて、そこに或限度の方法的差異が認められるに過ぎないものと思ふ。經驗科學の對象は、自然性のものか意志性のものか二者その一である。前者は原因の發動進行であり、後者は目的の發動進行である。一の問題は原因觀によつて解釋され、他の問題は目的觀によつて解釋される。この區別は對象たる事物の性質によつて區別され、同一の事物

も、原因觀によつて見るときは自然となり目的觀によつて見るときは意志となるといふ意味に解するのではない。地物が自然なることは勿論であるが、人間の生活には自然性のももあり意志性のももあり、多くの生活方面は二者が密接に結付いてゐる。

經驗科學たる經濟學の對象は經濟生活であるが、これが自然の生活なるか將た意志の生活なるかは、經濟學の對象性に就て先づ起る所の根本問題である。經濟生活が自然性のものであれば、經濟學は自然科學となり、そが意志性のものであれば、この科學は意志科學となる。本來、經濟生活は人間が地物を利用する所の生活、趣向の方面と人々が地物利用に關して交通する所の生活、交渉の方面との二大部を包含する。一は利用經濟であり、他は交通經濟である。利用經濟は、原始人を除いては凡て意志生活となつてゐるから、これを對象とする利用經濟論は意志科學となり、意志活動の成果は文化であるからそはまた文化科學ともなる。然るに交通經濟にありては、交通する諸私人並に公共團體は意志であり、それ等の營める各箇經濟は意志活動であるが、これ等の意志及び意志活動の結合せる交通關係そのものを指す所の綜合經濟が意志性なるや否やは別にこれを考察しなければならぬ。我等が通例、經濟學と名づけるものは綜合經濟を研究對象とするものであるから、綜合經濟が自然經濟なるか將た意志經濟なるかは、經濟學の問題及び性質を決せしめる最も重要な目標となる。

マーカンチリズムの經濟學説は概して時代の要求に基ける政治經濟論であつて、綜合經濟たる國民經濟を意志經濟と見てゐた。しかしこゝでは、マーカンチリズムが國民經濟を成立せしめたと言ひ得る時代であるから、この時代の學説は自然經濟と意志經濟とを明確に對立せしめて後者を認めてたのではなく、政治經濟觀が即ち意志經濟觀となつてゐたと言つてよからう。この學説に反動して且フジオクラットに呼應して起れるアダム・スミスは、政治經濟論と社會經濟論とが分化せる時代の先覺者であつて、彼の學説には尙ほ幾分かは政治經濟論を存置して居るが、大體に於ては社會經濟論の一大體系であつた。彼の時代には已にマーカンチリズムによつて形態を整へ得たる英吉利國民經濟が、更に内容に於て自然經濟たる社會經濟を著しく發展せしめつゝある時であつた。スミスはこの社會經濟に着眼して自然的自由の組織を提唱した。かくてスミスの學説は著しく自然科學的になつて來たが、しかし單純なる自然經濟の説明でなく、その優越を主張するものであるだけ尙ほ過渡期の色彩を帯びてゐた。その後に出でたるリカルドの學説に至つては、社會經濟の進歩に伴ふて殆ど自然經濟を説く自然科學となつた。自然の社會經濟は資本經濟組織の完成に近づくに従つて益々榮えて來たが、この時代を受けて自然經濟學の一大體系を建てこの方面に於て最後の結論を提出したるものは言ふまでもなくマルクスであつた。自然經濟學はフジオクラットに呼應せるスミスに始まり、商品の本質を説明せるマルクスに終つた。但し、ス

ミスは政治經濟を斥けて社會經濟を迎へたが、マルクスは社會經濟を斥けて政治經濟を迎へようとしたのであつて、時代の要求が異なる通りに各自の實踐的態度も相反してゐたが、自然經濟を説明する點に於ては二者同様であつた。

かゝる自然經濟觀に就ては必然に有力なる疑問が提出される。我等の綜合經濟たる國民經濟は果して自然經濟として説明されるに止まるであらうか。この疑問を解くべく起つたものが獨塊の國民經濟學である。獨逸の歴史學派は英吉利流の自然科學的經濟學に反動して起つたが、歴史的研究は自ら自然運動の外に意志活動に面接せざるを得なかつた。その外に十九世紀に於ける英吉利が自然經濟たる世界經濟の中に伸び行くに當つては、自ら自然經濟學がその指導者たる地位を占めてゐたが、これと反對に、同時代の獨逸にあつては先づ國民經濟を整へる必要があり、その爲には自然經濟學説は實踐の指導に役立たない。かくて歴史學派は史的敘述に忠實なるにも拘らず、却つて他面に於て意志經濟の側に於ける政策論に少からの努力を用ゐた。歴史派に反動して起つた奧地利學派は史的敘述に代ふるに理論の探求を以てしたが、その理論は歴史派の後に出でただけにその以前の自然科學的理論に反へることは出来ないで、主觀價值説を中心として意志科學的方面にその特色を發揮した。斯の如くにして獨塊の國民經濟學は概ね慾望論に出發して主觀價值を説き、進んで政策論及び財政論を體系に收める諸點に於て著しく意志經濟に亘り、意志

科學的研究に傾いた。然らばこの學派は果して正統學派及びマルクス學派の自然經濟學と對立する意志經濟學たるを得たであらうか。

獨逸の國民經濟學によれば、經濟とは經濟主義に據つて行はれる活動の系統であると見る。經濟主義に據る活動は明かに意志活動である。併しその意志活動は、個人・家族・企業・公共團體等の各箇經濟にのみ存すると見て、綜合經濟たる國民經濟にはこれを認めない。この國民經濟學では、國民經濟には統一意志なしと見る。さすれば、各箇經濟には意志活動が行はれても綜合經濟には自然運動が行はれのみである。各箇經濟は經濟主義に據る計畫的活動をなすが故に、これを對象とする家計論・財政論・私企業經營論及び公企業經營論が意志經濟學たる資格を具へることは當然である。されど統一意志なき國民經濟に於ては、せつかく、經濟主義に據りて出發したる各箇經濟の意志活動も、何時の間にか闇黒の自然界に亂れ入つて、多くは暗闘・排撃に精根を盡くし稀に友を呼んで相助けようとするに過ぎない。各箇經濟の意志性と綜合經濟の自然性とを明確に區別しなかつた國民經濟學は、最初に經濟主義と計畫的活動とを高調し置きながら、綜合經濟そのもの、説明に當つては、商品價格の騰落や恐慌や失業の如き甚しい反經濟主義の非計畫的運動を體系的に説明することが出来なかつた。最初に掲げたる經濟の定義が國民生産や國民分配の經濟現象を解釋する概念となり得ないやうでは、卷頭の定義は意味のないものとなる。價值説の

如きも自然經濟學のやうに、客觀價值で押し通せば説明は透徹するが、意志に立脚する主觀價值から自然に出現する客觀價值に出ようとすれば、意志が自然化する過程を明かにすることが頗る困難となる。是に於てか近時有力なる學者の中には、客觀價值即ち價格と見て、これを中心に置き、價值論を經濟學から追逐してこの難關を避けようとしてゐる。さうすれば國民經濟學は自然科學となるだけであつて、自然現象を對象とするならば、本來の意味に於ける價值に面接する機會もなくなつて、問題の解釋は甚だ安易となつて来る。しかし經濟學から本來の意味に於ける價值を追放して置いて、果して心安らかに研究が續け行かれるであらうかは大なる疑問である。尙又、國民經濟に統一意志なしとすれば、經濟政策論は全く成立の根據を失ひ、こゝにもまた從來の國民經濟學は自らその體系を破壊することゝなるが、この點は更に後に述べることゝする。

四

國民經濟に統一意志ありや否やに就ては、近時グルンチェルが、國民經濟には共同意志があつて國民の生活を配慮すること云つて居り、その他にも同様の見解を立てる者があるかとも察せられるが、從來の通説は、自然經濟學は勿論として獨塊の國民經濟學でも概して否定的見解をとつてゐる。私經濟に對する公經濟殊に財政主體が意志であることは勿論であるが、公經濟は各箇經濟の一端であるからその意志は國民經濟の意志ではない。しかし公經濟に屬しない經濟運営に於て國

家意志の發動せる事例は極めて多い。國家が國民經濟の内容の一たる財務經理に於て家計と對立する財政を營む限りは、尙ほこれに加へて、等しく國民經濟の内容の一たる企業經營に於て私企業と對立する公企業を經營する限りは、その國家の活動は私經濟に對する公經濟の活動に過ぎない。之と異り例へば國家が米の價格を調節するが如き活動は、已に公私經濟を超へて國民經濟を統制する所の活動となる。

人々が人格を擧げて結合せる團體はこれを基本團體と名づけ、特定の事業を營む爲めに生じたる派生團體と區別する。この基本團體は共同組織と相互組織との二通りの組織が合體せるものにて、その中にも相互組織たる社會は唯だ個人意志の連結關係に過ぎないが、共同組織たる國家は諸個人意志の上に生じたる共同意志を體持し、それが基本團體に於ける統一意志として實在し活動する。然るに經濟生活であれ、何であれ、我等の一切の生活は凡て基本團體の中に行はれ、嚴格に言へば、全く基本團體の中に現はれないやうな生活方面は一としてあり得ない。従つて基本團體の中に現はれる公私の各箇經濟の活動が唯だ社會の中に行はれるに止まるならば、各箇經濟並にそれ等の交通關係は唯だ自然的機制に従ふのみにて、未だ何等の意志統制を受けてゐない。これと異り各箇經濟の上に國家の意志が總括的に支配を始めるときは、國家意志は基本團體の意志であるから、凡ての各箇經濟がその意志統制に服することゝなる。基本團體の中に最も廣く且

つ密に繋れる生活方面は經濟生活であるが、その生活に獨立の意志統制を加へるものは基本團體の意志の外にはなく、従つて國家の意志の外にはない。パリアメントに對してナショナル・ギルドを置き、これに生産専門の獨立意志統制を行はうとする企圖は、自由主義に未練多き英吉利思想界に特有なる考方であるが、それとても結局は國家の統一意志に依存せざるを得ないやうな見方に改造された。綜合經濟たる國民經濟が國家の意志統制に依存するとき、その限りに於てそれは自然經濟でなく意志經濟であり、社會經濟でなく政治經濟である。但し、自然のみは現實に存在するも自然より出でたる意志は必ず自然を伴ひ、純粹意志は現實には存しないから、意志經濟たる各箇經濟でもその中に自然經濟層を包含してゐる。國民經濟が意志經濟となつてもそれは各箇經濟よりも一層多く自然經濟を伴ふてゐることは云ふまでもない。

國民經濟に統一意志を生ずると云ふことは國家意志が國民經濟の統制に立入ると云ふことである。國家統制の意志經濟は、尙不具なる形態であつたが、已にマーカンチリズムの時代に出現した。その後反動的に自由主義組織が榮えるに従つて國家は事實に於て統制の手を弛め、英吉利の如きは經濟現象としては殆ど自然經濟と擇ぶ所がなかつた。自然經濟學はこの間に發展した。

然るに世界大戰は休息せる國家意志の出勤を促進した。自由經濟の本場たる英吉利さへも一朝にしてそれから統整經濟に移つた。その時に、獨逸國民は偉大なる組織の威力を發見したと言は

れ、英吉利國民は忘られたる國家を發見したと言はれてゐる。その組織に依りその國家に依る國民經濟の活動こそ鮮明に意志經濟の特徴を描出したものと言へるのである。

五

現代の國民經濟は、概ね國家意志の統制に依る意志經濟となつてゐる。しかしその統制は國家意志が綜合經濟に及ぼす實力の尙ほ弱きが故に、そこには尙ほ廣い自然經濟の層が残存し、更にまた經濟組織に於て自由主義をさるときは、少くともその主義を適用する範圍に於ては、そこに成立つ自由經濟層は、事實上では自然經濟層と同様の現象を呈する。かくて我等は綜合經濟たる國民經濟の現象を觀察するときは、先づ自然經濟現象と意志經濟現象との二類の現實態を區別して見る。先に擧げた例のやうに、米の價格が一石二十圓より五十圓まで上下するは自然經濟現象であり、政府が一石三十五圓に維持するは意志經濟現象である。

綜合經濟の現實態は唯一通りであつて何にも別々に實在する自然現象と意志現象とが結合したものである。併しその一通りの現實態の中に綜合意志の發動する部分と然うでない部分とがあるから、我等はその區別に従つて觀察するのである。經濟學に於ては、長い間この區別が無視されて來たが、これを認めないでは到底今日の經濟現實態を説明することは出來ない。最近の金融恐慌は自然に襲ひ來つたが、支拂猶豫令は意志的にこの恐慌を差止めた。この際に、自由主義者

は支拂猶豫令を無益有害となし、恐慌の進むだけ進ませて置いて、財界の病態を徹底的に排除せよと言ふであらう。併し策の得失は別問題であつて、支拂猶豫令が自然の發動でない人爲の行動たることはこの學派に於ても認める所であり、またかく認めるから、即ち國家がかゝる政策をとする自由意志を具へてゐるから、これを爲さない方がよいといふ結論を生ずる。これと異り自然主義の立場より見れば、支拂猶豫令もまた資本經濟といふ一の自然的機構の中に起る自然の事實であり、國家の意志力もまた個人の意志力と等しく自然界に現はれる自然力を構成する一要素であると思ふべきであらう。この見方は國家を以て自然形態たる資本經濟の中樞をなすものと見るからであるが、しかしこの見方を進めて行けば、今の國民經濟は國家的資本家的合同であるといふ見解を生ずる。かく見れば國民經濟は自然の進行によつて一轉して意志經濟となる。資本經濟組織と勞働經濟組織との孰れを可とするかは別問題である。資本經濟を不可なりとしても、それが不可なるがまゝに、國民經濟は自然經濟から意志經濟に移るのである。

我等は自然と意志とを本質的に區別するから均しく現實態に對して存在を認定する場合にも自然現象を見ると意志現象を見るとは、それぞれ異つた點に着眼する。前者に對しては原因發動の過程を認め、後者に對しては目的實行の過程を認める。一は何の故に然るかを探り、他は何の爲に然るかを尋ねる。米價の動搖に對しては何の爲に然るかを問ふを得ない。米價の維持に對して

は何の故に然るかと問ふを得ない。唯だ米價維持は米價動搖に對して行はれるやうに、意志經濟現象は自然經濟現象の上に生ずるから、自然現象の認定は唯だその自然を見ればよいが、意志現象の認定では、意志が如何に自然に働きかけてゐるかを見るのである。我等は第一の問題として、自然經濟の現實態に對しそが如何に存在するかを認定し、次に第二の問題として、意志經濟の現實態に對しそが如何に存在するかを認定する。前者は自然科學的研究となり、後者は意志科學的研究となる。

綜合經濟に於て自然經濟と意志經濟との二階層を認めるときは、經濟の現實態を認定するに於て自然經濟の認定と意志經濟の認定との二つの問題を生ずることとなるが、この意志經濟の承認は、更に經濟學をして存在認定の外に適合判定といふ別の任務を負はしめる根據となる。自然のみを對象とする科學は、例へば人類學や實驗心理學のやうに、唯だ存在を認定するのみにて適合の判定を任務としない。意志を對象とする研究となれば、意志が如何に動くかを認定する外に、意志が如何に動くを可とするかを判定する問題が加つて来る。

六

我等が知るといふ場合には、或現實に對してそこに何が存在するかを見留め知る場合と、或實現に對しそこに何が適合するかを見別け知る場合とあつて、而かも知るといへばこの二つの場合

に限られる。見て知るといふことは同様であつてもその見やう知りやうに存在の認定と適合の判定との根本的差別が存する。認定の成果は認識であるが、判定の成果はこれを判智と名づけよう。判智は示命でも要請でも教訓でもない。日本人の榮養及び生産の便宜より見て魚肉と獸肉と孰れが食料として適合するかを判定すればそれが判智であつて、そこには別に何々すべしといふ意味は含まれてゐない。存在を認める断定も適合を判ける断定も断定作用としては同様である。

認識の體系が科學となる如く判智の體系も亦科學となり得る。一は存在科學又は認定的科學であり、他は適合科學又は判定的科學である。研究の對象が自然のみなるときは自然科學のみが成立し、これを研究の任務より見るならば自然に對する研究は存在科學を成立せしめるのみ。これと異り研究對象が自然の上に立つ意志をも包含するときは、その研究は自然科學的研究と意志科學的研究を包含するのみでなく、更に研究の任務より見れば、それには存在科學的研究と適合科學的研究とを包含するのである。

國民經濟に統一意志ありと認めるときは、先づこの意志の現實態に對する認識を生せしめるが、更にその意志の實現に對し、如何なる意志活動が國民經濟の目的に適合するかを判定する判智を生せしめる。その體系が謂ゆる國民經濟政策論である。故に若し國民經濟に統一意志なしと認め、それは單に自然經濟に止まると断定するならば、そこには適合判定の主體が存しないから、

科學としての經濟政策論は全く成立する餘地がない。各箇經濟の意志はその生活目的にとつて如何なる活動が適合するかを判定し得るも、綜合經濟に就て適合判定を試みることは全く不可能である。また社會の公共的利益を目標として政策論を試みる場合があるが、それは全く不可能である。一の標準であつて、政策論を成立せしめる基礎とはならない。判定主體たる綜合經濟の意志を確認しないで綜合經濟に關する政策的立言をなすならば、それは凡て科學性を缺ける空想論となる。

從來の多くの經濟學、殊に獨逸の國民經濟學が、一方に國民經濟の統一意志を否認しながら、他方に經濟政策論の科學的研究を試みることは明かに論理的矛盾である。マルクス學派は是までの國家意志を有産者階級意志と見て綜合經濟の意志と見ず、綜合經濟の意志は共產組織の成立と共に生ずるといふ見解をとつてゐるから、その經濟學體系に政策論を收めないのは論理的に當然である。但しこの學派の一部では、資本經濟組織をとれる現時の國民經濟は國家的資本家的合同であると見てゐる。従つて今の國民經濟はマルクスの時代と異り、私の謂ふ意志經濟と見做される。かく見るときは、たとへ資本的國家の立場より見たる經濟政策論と雖も論理的には正當なる科學的政策論となる。勿論政策そのものは有産者階級意志の立場から立てられたものとして、無産者階級意志の立場から一律に否定し去られることは、これもまた當然の見方である。併しその否定と云ふことは或政策が或目的に適合しないと判定することである。その際にその目的が無産者

階級意志より見たる目的であるならば、その否定的政策論は科學的根據を有しない。何となれば、たとへ資本家の國家であつても、これに依存して立つ意志經濟はその意志と同等以上の他の意志の存在を許さないからである。これと異り上述の目的が綜合經濟意志より見たる目的であるならば、始めてその否定的政策論が科學的となる。しかしこの場合には無産者階級意志は基本的共同組織たる國家の意志の下に立つ政黨意志となり、この意志が國家的資本家の合同たる國民經濟を國家的勞働者の合同に變革すべく、綜合經濟に於ける裁決意志の地位を争ひ取らうとする立場に居るものである。かく見るならば、謂ゆる有産者階級の經濟政策論も無産者階級の經濟政策論も共に同一の地盤に立つことゝなるから、たとへ主張は全く反對に立つことも双方の間に學問的交渉だけは成立し得る。若しそうでなければ兩者の間の一切の言論は全く學界と關係なく、唯だ戰に臨んで叫ぶ味方への合言葉か敵への吶喊かに過ぎないことゝなる。言論に學說と戰術との根本的區別が立てられ得るやに就ては更に細かい言論を必要とするが、しかし我等の實際生活に於ては、言論が餘りに戰術化し行く傾向を見るときには却つて言論を學說化しようとする要求を強める。學說としての經濟政策論は現實國家の裁決意志を如何なる階級が占有し居れるにもせよ、常に基本的共同組織たる國家の總統意志の立場から、何が綜合經濟たる國民經濟の目的に適合するかを判定するにある。

國民經濟は自然經濟の上に立つ意志經濟であるから、適合の判定もまたこれ等の二つの階層に向けられる。即ちそれは自然經濟に對する判定と意志經濟に對する判定とである。この場合に判定の對象となるものは實現態であつて、認定の對象たる現實態と趣を異にする。現實態はかくありと見られる現成の状態であるが、實現態はかくあらうと見られる將成の状態である。この區別は實用的には概して時の過去と將來との區別と同視して差支ないが、その意味する所は、時に關係なく、對象に向へる能知者の見方の相違から來るのである。未來の事件と雖もこれを豫言するは現實態に對する認定である。過去の事件と雖もこれを批判するは實現態に對する判定である。單にかくあるといふ現實態に對しては批判を加へる理由がない。かくあらうとする實現態に對するとき、始めてそれが我等にとつて可なるや否やを見別ける必要を生ずる。死兒の齡を數へることを思ふことゝ考へるのは、實現態でない現實態に對して批判の眼を向けようとするからである。尤も實現態は決して現實態と別箇のものではなく、大體に於ては同一のものに對し能知者の見方を變へ、所知者の性質を現實態から實現態に轉化させたものに過ぎない。されど細かく云へば、實現態の内容は決して現實態の内容そのまゝではなく、その外に可能態が加つてゐる。現實態は唯だあるだけのもの、あるまゝのものであつて、可能といふ要素が加つてゐない。現實態を敘述

する歴史は可能を記さない。然るに歴史上の事件を批判するときには、現實態の外にかくもあり得たといふ可能態を加味して後に見方を實現態に變へ、これを批判の對象とする。一般に可能態の研究は自然可能性と意志可能性によつて異り、前者は後者に比べて著しく狭く局限される。

自然實現態に對する適合判定は、判定者の生活内容に加はる所の自然に對する判定である。判定といふ以上は、判定者が意志なることは勿論として、判定の立場もまた判定者たる意志の立場に外ならない。若し能知者が所知者たる自然そのもの、立場に於て判定するならば、それは自然に關する意志的解釋となる。かゝる見方が科學的研究に於て許されるかどうかは大なる疑問であるが、それは孰れにしてもこゝにいふ自然實現態に對する適合判定には屬しない。次にまた自然實現態に對する判定は、意志に對する自然の存在の可否如何を見別けるだけにて、意志の爲に自然を如何に處置すれば可なるかに就ての判斷ではない。それは後にいふ意志實現態に對する判定に屬する。

自然實現態に對する判定に次いでは意志實現態に對する判定に移る。これにあつては意志が自然を處置する所の意志活動を判定の對象とする。意志は自然の上に生ずると同時に、意志は全く自然から解脱したるものでない。因果を撥無して自由自在たりといふやうな純粹意志となることは、實際には到底期待され難い。少くもかゝる意志は經驗科學の研究對象とはならない。こゝに

我等が問題とする意志活動は、自然に働きかける意志の作用を指すのである。意志の自然に對する處置には種々の條件如何によつて、自然の實現に服従する場合・自然の實現に順應する場合・自然の實現を操縱する場合・自然の實現を拒斥する場合の四階段に分たれる。前の二つは意志力が自然力の下に居るときに起り、後の二つは意志力が自然力の上に居るときに起る。自然の實現に服従するは例へば國家が利率を左右し得ないやうに甚だ意氣地ない譯であるが、しかしこれとても服従することが生活目的に適合すると判定するは、やはり意志實現態に對する判定に屬し、自然實現態に對する判定ではない。同時にまたかゝる生活は自然生活ではなく意志生活に屬する。自然の實現を拒斥する場合は、例へば貨幣制度を整へて惡貨横行の自然現象を全く起らしめないやうにすることは、一見すれば自然を離れた純粹の意志生活の如く見ゆるも、實は意志力を以て自然力の發動を抑へ居る所に自然との交渉があつて、全く自然から解脫した境地ではない。従つてかゝる場合の判定もまた服従の場合の判定と同様の適合判定に外ならない。

米の價格が二十圓から五十圓まで動搖するといふ現實態は唯だそれだけのこととしてこれを認識に收める。米の價格がかやうに動搖しようとする實現態に對しては、我等は國民經濟の意志の立場からその目的にとつての適合如何を判定する。斯の如きものが自然經濟の實現態に對する適合判定であつて、經濟學の第三の問題となる。次に政府が米の價格を三十五圓に維持するといふ

現實態もまた唯だそれだけのこととしてこれを認識に收める。米の價格をかやうに維持しようとする實現態に對しては、我等はまた國民經濟の意志の立場からその目的にとつての適合如何を判定する。斯の如きものが意志經濟の實現態に對する適合判定であつて、經濟學の第四の問題となる。

八

國民經濟は已に意志經濟となつてゐるが、均しく綜合經濟であつても國民經濟の結合より成れる現代の世界經濟は、未だ國民經濟と同じ階段の意志經濟となつてゐない。寧ろ世界經濟は意志經濟たる多數の國民經濟が競合する所に成立する自然經濟であると見ると穩當とし、唯だ國際團體意志が國際法によつて國際經濟關係を統制する限りに於ては、こゝにも亦綜合經濟の意志を認め得るのである。然らばその世界經濟の意志と國民經濟の意志との關係如何、前者の成長は後者の獨立性に如何なる變化を與ふるか。かゝる問題は世界經濟論の研究にとつては極めて重大の意義を有するが、今それに立入ることは論題を餘りに擴大することゝなるからこゝでは差控へて置かれたし。

世界經濟の意志が如何なる性質のものであるかは別に攻究することとして、ともかくその意志を認める以上は、世界經濟論には亦國民經濟論に於けると同様に四つの問題が提起される。その

中にても、世界經濟は大體に於て自然經濟と見られ得るが故に、第一の問題たる自然經濟の現實態に對する認定が最も重きをなす。而かもそこでは世界資本經濟の自然的組織及び運營が考察の要部を占める。諸國の帝國主義活動も世界經濟の中に生ずる自然運動の部分として觀察される。恐慌の研究も、マルクスがその經濟學體系の最後の部門として「世界市面及び恐慌」を擧げたやうに、世界經濟論の第一問題中にても頗る鄭重なる取扱を受ける。第二の問題たる意志經濟の現實態に對する認定は現實が尙ほ甚だ貧弱なるだけ未だ重きをなすに足らないが、しかし將來は漸次に有望となるであらう。こゝでは國際主義が活動の原力となり、通商制度や勞働制度などの成立發展の過程が目下の問題とされる。第三及び第四の問題は、世界經濟の意志が極めて幼稚なるが故に、經濟學の體系の中に占める地位は殆ど言ふに足らない程度にある。第三の問題たる自然經濟の實現態に對する判定の如きは、世界經濟が大體に於て自然經濟であるだけ、頗る豊富なる内容に收め得るやうに考へられるが、實はその反對である。偉大なる人格者は個人であつても世界意志を體持し得る。しかしその意志は分身的・潜在的の世界意志であつて、世界經濟を批判する實力ある意志ではない。無産者の萬民的同盟はその共同組織の意志を以て世界意志の位に登らうとしてゐる。この同盟の共同意志は確かに強くなり得るやうであるが、しかしこの意志は明かに國民意志と交叉し撞着する。恐らく無産者同盟意志が國民意志を破壊してそれ等を超へる所の世界

意志に成長しようとするまでには、それに先つて國民意志の方がかゝる世界意志の成長を必要ならしめるやうな處置に出るであらう。世界意志は國民意志を破壊することなく、國民意志の共同參與によつて成立し成長するものであると考へられる。ともかく將來のことは別として現在の世界意志は僅かに國際團體に於て事實上一定の限界を持つやうな極めて幼稚なる國際團體意志に過ぎないから、その微弱にして且つ聰明を缺ける意志が試みる適合判定は決して大なる成果を擧げ得ない。世界經濟の自然實現態に對する適合判定が已に然うであるから、頗る貧弱なる意志現實態より轉化せる意志實現態に對する適合判定は現在に於ては更に一層收獲の見込が少ないのである。

九

以上私は經濟學の四問題を列擧し、特にそれを國民經濟に適用して考察した。然るに經濟學の研究對象はこれを經濟活動が一主體又は一原動力に總括されたる系統として見るときは、各箇經濟、國民經濟及び世界經濟の三となる。各箇經濟が綜合されて國民經濟と成り、國民經濟が綜合されて世界經濟と成る。これ等の三は各々自然經濟層と意志經濟層とを具有するから、各箇經濟論（家計論・財政論・私企業經營論・公企業經營論）と國民經濟論と世界經濟論とに於てそれぞれ先に掲げた四つの問題が提起される。されど四つの問題の取扱方は三種の經濟が重なつて一が他を

包含する關係に立つが故に各種の經濟毎に相違せざるを得ない。

三種の經濟の中にて、比較的に意志層と自然層との厚薄を異にする點を擧ぐれば、自然層にあつては各箇經濟のそれが最も薄く世界經濟のそれが最も厚く、意志層にあつては各箇經濟のそれが最も厚く世界經濟のそれが最も薄い。國民經濟は二層の配合に於て正しく他の二者の中間にある。然るに意志の特質より見るならば、各箇意志が國民意志に服従する場合には原則として無限定なるも、國民意志が世界意志に服従する場合は狭く限定されてゐるから、意志經濟に重點を置き、意志科學としての經濟學を研究するに當つては、國民經濟論が經濟學の全體系に於て中心たる地位を占める。是まで多くの學者は國民經濟學即ち經濟學なるが如く考へてゐるが、かゝる見方が許されるには今述べたやうな理由で肯定されると思ふ。されどかゝる重要な意義を有する國民經濟と雖も、それ等が相並んで立てる世界經濟の中にあつては、世界意志は尙ほ頼み難く、多くは自然の趨勢によつてその運命を左右される。従つて自然經濟に重きを置き自然科學としての經濟學を研究するに當つては、世界經濟論が經濟學の全體系に於て最も重要な地位を占める。従來の經濟學に於ける自然科學的理論の通用力を考查し更にその完成を企てようとするならば、必ずこれを世界經濟論に於て試みなければならぬ。例へば貧乏問題は尙ほ國民經濟論の問題となるが、人口問題に至つてはもはやこれを世界經濟論の問題となさざるを得ない。

國民經濟に於ける意志統制の擴充と世界經濟に於ける自然機制の發展とは、兩々相絡んで並進し行く。これこそ現代人類の經濟生活にとつて最も意義深き大勢の推移である。現代經濟學の研究はそこに力を注がなければならぬ。

一〇

現代科學の特徴は種々あるであらうが、その中でも獨逸の諸學者によつて提唱されたる非自然科學の樹立は確かに最も意義深き特徴の一つであらう。由來東洋人は非自然科學的研究を長所としてゐたが、我等は今新しき科學說を迎へ同時に古き先賢の思想を顧みるとき、二つの流は合體して力強く學界の未開地を灌漑しつゝあるが如き感を覺ゆる。非自然科學の特質に就ては今尙ほ諸說相交つて歸一する所を知らない。私は尙ほ極めて未熟の考なれど今の所では、自然に對立するものを意志となし、自然科學的研究に對立せしめるに意志科學的研究を以てするのである。自然に對するものは歴史といはれるが、歴史は道元が「我を排列して我これを見る」と言へるが如くにこれを意志活動の經歷なりと見る。自然に對するものは文化といはれるが、文化はこれを意志活動の成果なりと見る。自然に對するものは價值といはれるが、意志が判定するの故を以て價值が成立する。自然に對するものは一箇性又は一回性といはれるが、意志なるが故にかゝる特性を帯びて來る。經驗的に見れば自然から意志が生れる。意志となつて後に意志ならぬものを見返へ

すとき、それが自然として眼中に映ずる。従つて意志活動に對する能知者は意志であるが、自然運動に對する能知者もまた意志である。所知者が自然運動なるか意志活動なるかによつて自然科学的研究と意志科學的研究との差別を生ずる。

意志は見廻はして知らうとするあらゆる實境の眞中に立ち、内圓にある意志活動と外圓にある自然運動とを視界に收める。然るに、山中の賊を破るは易く心中の賊を破るは難し、遠き自然を知るは易く近き意志を知るは難し。心理學の研究にあつても、實驗に訴へる研究は寧ろ易く、深い反省に訴へる研究は先覺者の研究せる所を學ぶ場合でさへ追隨に苦むことがある。殊に團體意志の反省に至つては科學の研究方法の中にも極めて困難なるものと言つて差支なからう。

意志科學的研究にあつては、研究者が先づ研究對象たる意志の立場に立たなければならぬ。各箇經濟でも國民經濟でもまた世界經濟でもそれぞれに具はる意志經濟を研究するに當つては、研究者は必ずそれぞれの經濟に實在する意志の立場に立たなければならぬ。尙ほまた研究者が研究對象たる意志の立場に立つといふことは、上に擧げた三種の經濟ごとにそれぞれ異なる所の現實の意志の中に身を置いて、研究者が任意にその現實の意志の意力や志向やを加減してはならないと言ふことを意味する。研究に當つて研究者が現實の基礎の上に立つや否やと云ふことが、科學論と空想論との岐れる所である。但し私は決して空想論が人生にとつて價值が少いと云ふのではない

い。偉大なる創造は數々空想から出發してゐる。こゝでは唯だ科學としては斯くなければならぬと言ふに過ぎない。尙ほ自然經濟の研究に於てもそれぞれ對象とする經濟の異なるに應じて一定の意志の立場をとるを要するが、この場合には反省の困難なく唯、外界を觀察するに止まるから、意志が平靜であれば事足りる。

現實態の認定より移つて實現態の判定に至れば、上に述べたる所の意志の任務は益々重大となる。中に就き、自然經濟の判定に比し意志經濟の判定には、特に研究者の意志が研究目的より見て純粹ならんことを要求せられる。しかし實際にはそれが甚だ困難であるから、科學的經濟政策論の研究は普通に想像されるよりも遙かに難業である。

智識は知らうとする意志によつて求められる。我等が研究の問題を考へるときに、意志が意志を中心として周圍を見廻はすならば、單に意志の現實の動きを見留めるのみならず、それと共に自然の現實の動きが明かに見留められる。意志は動くと同時に動かうとする。動かうとする志向に添ふて見るときに、意志の實現を見別け得る。それを見別けるときにまた、意志の實現に迎合し又は反抗しようとする自然の實現を明かに見別け得る。かやうな知らうとする意志の活動過程が、我等の經濟學に於ても上述せる四つの基本問題を提起させるのである。